

## 紫溟会における「人物養成」観について

佐喜本, 愛  
九州大学大学院 : 博士後期課程3年

<https://doi.org/10.15017/1030>

---

出版情報 : 飛梅論集. 3, pp. 51-66, 2003-03-28. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻  
教育学コース  
バージョン :  
権利関係 :

## 紫溟会における「人物養成」観について

佐 喜 本 愛\*

### はじめに

本稿は、明治前期の地方政治家がどういう人間形成を行おうとしたのかを熊本の政治結社紫溟会を例に明らかにしようとするものである。

当時の地方政治家の人間形成観・教育観については、各地の政治史あるいは中学校史研究等の蓄積の中に相当の言及を見ることが出来る。その研究成果に表れる通り、地方的課題や政治的立場の違いに応じて実に多様な考え方があった。本稿の研究対象である紫溟会の立てた構想ならびに実践についても複数の研究において言及はある<sup>(1)</sup>。たとえば、本山幸彦氏は紫溟会の教育思想が幕末から明治初年における熊本の自主的な士族の政治意識、土着性の中から生まれ、それは日本の国家主義教育を下から支える積極的条件を形成したと指摘している<sup>(2)</sup>。

これまで、明治前半期の中等教育史研究では、藩校の教育原理と中学校との連続性や中学校観が主な主題とされてきた。しかし、そこで指摘される学問的先進性といった授業のあり方のみならず、例えば斎藤利彦氏(『競争と管理の学校史—明治後期中学校教育の展開—』、東京大学出版会、1995年)が、くる日もくる日も年間を通じて繰り返されている「学校における日常的な教育事実」へ注目し、日常的な営為と実態によって実質的に規定される明治後期の中学校の実態を分析しているように、その実情に応じて学校全体で行なわれていた教育活動をトータルに分析する必要があると考える。

本稿では本山氏が紫溟会における教育の性格を「学制の主知主義に対する徳育主義、なお適切にこれを表現すれば錬成主義」と指摘していることを受け、より具体的に紫溟会の人々の教育的営為を跡づけ、そこからその教育観を導き出しすことを課題とする。このことにより「学制」頒布後の小学教育の普及とともに、徐々にではあるが中学校の整備が進められつつあった時代における中学校教育の「教育」活動の有り様を解明する一つの鍵となると考える。

### 1 紫溟会結成に向けての動き —同心学舎の創設—

熊本では幕末以来、横井小楠を中心とした経世的学問を唱える実学党、尊王攘夷を主張する勤王党、そして藩政の主流を占めていた学校党という三党が対立していた。紫溟会のメンバーの多くが

---

\*九州大学大学院博士後期課程3年

その対立を引き継ぐ第二世代であり、学校党の位置づく者たちだった。彼らは西南戦争に参戦するが、その敗北を経験した後、すぐに結集して士族の教育を行うために私学校同心学舎を創設した。この同心学舎が紫溟会の前身組織である。

西南戦争によって熊本は全市街の65パーセントが焼けたといわれ、急速に普及発達した小学校教育が戦乱の為に一時全校が閉校、県下唯一の中学校である県立熊本中学校も一時閉校するという被害を受けた。こうした教育の荒廃を打開するため、熊本県内には1878年以後数年間に中等教育機関として約20校の私学校が新設され、1879年に県立熊本中学校が復興された<sup>(3)</sup>。同心学舎は、対立していた実学党が創設した広取学校や県立熊本中学校に対抗するかたちで1879年に設立され、舎長、副舎長、幹事（2人）、教師（3人）他計10名で運営されていた。当時、幹事だった佐々友房<sup>(4)</sup>は、学舎設立当初のことを後年次のように記している。

一旦例の如く四五輩相会す。隅々机上にある西国立志編を把て之を読む。彼の斯爾斯氏の自序中に田舎の賤民の子弟等が自家又は庭前に於て読書算術を始め後遂に虎列刺病院の明屋を借受け一の学校を建設し遂に盛大を到せし云々の所至り読過再四日く吾輩の事亦此の如きのみ。所謂精神一到何事不成。苟も非常の精神を以て非常の勉強をなし以て歳月の久に涉らば其の目的を達するに於て何か有らん。彼の資金の如きは自ら至るの時在るべし。大凡事業を成すには精神を第一の資本とし金銭を第二の資本とす<sup>(5)</sup>。

実際、佐々らは資金不足という現実と直面したが、当時を振り返って佐々は自分たちの支えが「所謂精神一到何事不成」という考え方だったことを強調して語っている。

1879年作成の「同心学舎建設趣意書」では、公立学校の在り方が批判され、生徒の年齢、試験、授業料といった種々の制約・条件に縛られないことを私学の特権として積極的に肯定する学校観が示され、同心学舎設立の目的が次のように記された。

而して家屋矮陋なりと雖も構造粗悪なりと雖も各自奮励振起堅忍不拔の志力を養成し進取敢為の気を磨励し千古の通弊を看破し一世の元気を振輝し以て我が皇威の尊嚴を益し、我が国権の拡張を謀らんとす<sup>(6)</sup>。

彼らは、貧富、身分、官民の違いに関係なく皇威の尊嚴を益し、国権を拡張しようとした。その手段として養うべきものを「堅忍不拔の志力」「進取敢為の気」「一世の元気」の三つとしてあげている。このように「志力」といった精神面を重要視する傾向はかねてあった。藩校時習館廃止後の1873年に佐々らが自ら設立した私塾惜陰舎の様子について、この惜陰舎で共にすごした佐々の四つ後輩の宇野東風（1858年生）は、当時の様子を次のように回顧している。

実は名計りで寄宿生等は光陰を惜しんで孜々として学問を勉むるという風ではなかったようがあります。然し明治維新に関係した志士の作った詩歌を集めたもので殉難草、振気篇、興風集など、いふものが在りまして、此等を好んで朗吟するとか、水戸学の弘道館記、新論、回天詩史などを読まするとか大に士気を鼓舞することを先輩は努めて居りました<sup>(7)</sup>。

また、三浦喜伝（生年不明）は「先生（佐々友房一筆者注）は別に学問を講義するといふ意味ではなく、明治維新の大業に対する我々の覚悟に就いて東洋の大局からみて淳々と説かれていた<sup>(8)</sup>と

し、佐々と共に同心学舎で教鞭を執っていた高橋長秋（1858年生）自身も「吾々は今更茲に坪井の精神等と業々しく宣言する必要はないが、吾同志達は死生を誓い、燃へ盛る火の様な精神を持たねばならない。筆にも口にも表現出来ない気持ちであって、文句口上烈々字内を焼き尽す概を持ち、佐々が遺るなら俺も遺ろう。宇野が死ぬなら俺も死ぬ。生命なんか風の子だ、貴様も来い、俺も行く」と云った風な無条件な結合が坪井塾の鉄則だ。」<sup>(9)</sup>と記録している。

これらの回想から惜陰舎では、まず、何であれ、とにかく何かをしなければならないという気の高ぶりのもと、集団となって士気を高揚させることに重点が置かれており、それが彼等にとっての「教育」的活動そのものであったことが窺える。そういった教育についての認識は同心学舎以降の教育にも根深く残った。

話を同心学舎に戻そう。1880年に県当局に提出された「同心中学舎設立御届」には「学則」として経学、史学、法律学、地理学、経済学、理学、文学、数学、習字、洋学と記されている<sup>(10)</sup>。しかし、佐々は「学舎既に開業し仮に簡単な課程を設けたりと雖も其実際は器械もなく書籍もなく日々用ゆる所の書は自家所蔵に係る兵燹焼余の論孟子、外史、十八史略、文章軌範、等にして傍ら翻訳書を講究するに過ぎず。而して数学には加減乗除等を教授す。其他は大抵生徒相互に会読して疑義を質疑せしむ」<sup>(11)</sup>と当時を振り返っており、同心学舎の教授の実態は県への提出内容とはほど遠いものであったことが窺測できる。

同心学舎の教育にはこの回想にみられるような物質条件上の困難がつきまとっていた一方、生徒数をみれば設立当初、約20名だった生徒数は約半年後には約70名に増加していた。しかし、全国的な自由民権運動の高揚の中で同心学舎の生徒の中にも民権論を主張するものが現れ、同心学舎の運営は決して佐々ら経営者の思い通りには進んでいない。上述の広取学校や県立熊本中学校は多くの洋書を用いた洋学中心の教授が行われており、佐々を「圧制家」と評して退舎する生徒も少なくなかったという。この苦しい状況下佐々は「郷党教育」「生徒寄宿」を教育上「最も効力在るとの二要点」として採り入れ、「東肥」地方の特徴として「忠厚」「勤儉」「礼節」を貴ぶ気風が在るから、これを保持、拡張することが大切だと主張したらしい<sup>(12)</sup>。このように、佐々らの言説から読みとれることとして逆境を乗り越える手段が、学問講究という理の次元ではなく、特に精神面の教育効果を高めるための教育方法面の次元に求められたことを確認しておきたい。

同心学舎は資金難が続き、開校一年後に閉校の危機に瀕した。幹事佐々は寄附集めに奔走し、漸く汽船会社観光社から寄附を得て、1881年に「同心学校」と改称して学校維持を図った。だが、半年後には観光社も倒産し、資金源が断たれた同心学校はまた、閉校を余儀なくされた。

## 2 紫溟会の成立

上述のように同心学舎・学校で子弟教育に尽力していた佐々たちであったが、再び政治の舞台に登場する。本節ではその活動の展開を追っていくことにする。

全国的に拡がりつつあった自由民権運動の中で、熊本でも1878年に民権系の相愛社が結成され

た。それに対して熊本県出身の在官井上毅、安場保和らは官民調和、民権派の糾合を狙って、1881年に県内すべての政治集団を「忘吾会」として集結させた。この会を温床として、前述の同心学校を運営していた学校党の人達を中心とした「皇室を翼賛し立憲の政体を賛立し以て国権を拡張す」を規約の第一に掲げる会員数約2万人の政党紫溟会が同年に結成されたのである。こうして一度は熊本の政党が一つにまとまったが、その後実学党が君民共治を、相愛社は主権在民を主張して脱会し、それらは合併して九州改進黨を組織した。このような過程を経て熊本の政界は九州改進黨と紫溟会との対立抗争の時代を迎えたのである<sup>(13)</sup>。

同心学校の幹事として学校経営に携わってきた佐々、高橋及び1869年から約4年間アメリカ留学を経験した津田静一が紫溟会の幹事となって、会の教育的事業を担当した<sup>(14)</sup>。その事業は、教育機関済々黌の創設、機関誌『紫溟雑誌』の発行、武道場「振武会」の創設という三つに大分することができる<sup>(15)</sup>。

『紫溟雑誌』の中心的題材は主に主権在君、国権拡張に関する論<sup>(16)</sup>であったが、紫溟会の面々が抱いていた人間観や人材養成をめぐる考え方が随所に散見できる。例えば1882年12月『紫溟雑誌』第29、30号に掲載された「立志論」の論者龍巷布衣は世間の「男児」は「煖ヲ衣安ニ居リ跋々乎トシテ花街柳巷ニ去来シ未タ一事ヲ為スコトヲ試ミサル前ニ嘆息」している「行尸走肉」の状態であり、「婦人女子ニモ劣リタル」と批判し「男児ノ本分」とは「己ノ志ヲ立ツ豪毅ナル精神ヲ発達」させることだと明言している。「靈妙活発ナル精神」とは「天然固有」のもので、しかも「天下ノ男児」のみが有するものだという前提のもと、歴史上の「英雄豪傑」のように「陽気発処金石亦透精神一到何事不成」を心に留め実践すべきだということが強調されるのであった。

こうした民権派への駁論の根底にある教育観は、済々黌と振武会で具体化されていくので、それを次節であとづけていく。

### 3 紫溟会における教育実践とその特質

#### (1) 済々黌における教育

佐々、津田を含めた8人の紫溟会幹事は、廃校の危機に瀕していた同心学校を母胎に会の教育機関を本格的に創設することを決議し、1882年2月に飯田熊太（佐々の叔父）を黌長として済々黌を開校させた。開校式において朗読された「済々黌記」では、「群党蜂起、東集西嘯、有唱詭激放蕩之論、以欲破壊世道者」と民権派が批判され、青年子弟には「皇室之干城 国家之柱石」となることが求められた<sup>(17)</sup>。同年2月14日付の『熊本新聞』ではこの開校式の様子が「其より撃剣を催されしに、各々一世の伎倆を頭はして立合れし有様は、最も目覚しき見物にて、文武両道を錬磨さるる学校なれば、定て此より済々たる多士の此黌より輩出するならん」と報道されている。

民権派サイドでは済々黌が開校した1ヶ月後に徳富蘇峰を塾長に大江義塾が創設され、更にその勢いを増していた。その状況のみを『紫溟雑誌』の中では当時の「青年学生」の学習状況を問題にして民権派批判が展開されている。例えば、1882年8、9月の論説「教育論」の筆者谷弘道は、「今

日ノ学徒」が「欧墨ノ書ヲ視漢学者流ヲ陋視シテ固陋ト云ヒ頑固ト嘲」り、法律、経済、哲学、政治、という「学科」を「直ニ」学ぼうとする状況を問題にし、その学力は「数学ハ四則雜題ニ過キス筆ヲ執ラシムレバ纔ニ書牘ヲ認ムルニ足り物理ヲ談スレバ水ハ水素ノ集合カト思ヒ」というように一見、西洋の学問から知識を得ているように見えるけれども、大した成果には至っていないと述べる。ここで「今日ノ学徒」が直ぐに学ぼうとすると批判した学科のうち、「法律」、「経済」は中学校教則大綱に基づいて大江義塾、県立熊本中学校で教授されており、「政治」は大江義塾において洋書を用いて教授された主軸の学科であった<sup>(18)</sup>。批判の対象はそれらの学校及びそこに通う青年を指していると考えられる。谷は「青年学生何ゾ基本ニ帰ラザル何ヲカ基本ト云フ普通学ナリ」と「青年学生」に「基本」に戻るよう訴えていた。「普通学」とは具体的に「修身読書作文書画物理算術動植礦生理経済等」を指すのだと解説し、「之（孔子ノ教一筆者注）ニ過ル教有ルヲ見ザルナリ」と断言している。それでは、済々黌の教育はどうであったのか、以下に考察してみよう。

1882年の「私立 中学済々黌規則」によれば「本校ハ普通中学科及専門科英学支那語学ヲ教授スル所トス」（第3条）とされ、正則と変則二種の修業年限は3カ年であった<sup>(19)</sup>。同年作成の「教則」によれば学科目は「正則ハ経学史学文章理学地学法律経済数学体操」（第36条）、「変則ハ経学史学文章数学英学体操」とされている<sup>(20)</sup>。ところが、その「教則」と1882年に佐々が記した「済々黌歴史」と、1908年に山下岩之助が執筆した「済々黌歴史」には相違がある<sup>(21)</sup>。両者の記述ではいずれも、発足当時の学科目は「皇漢学、数学、物理、法律、文章、撃剣」と「英語」及び「支那語」とある。それは職員名簿<sup>(22)</sup>における「職名受持学科」に明記されている学科目名と合致している。そして、佐々、山下の「済々黌歴史」と職員名簿によると、1885年に、新たにドイツ語を加え、「経学皇典読書作文歴史算術代数幾何地理経済法律倫理修辞歩兵操練撃剣」と学科を改正したとされている。「修身」ではなく「経学」と記すところは修身の現状に対する批判と儒教道徳を学ぶことに対する意気込みを感じることができるし、「支那語学」教育が同校の一つの特徴であったことは既に指摘されることではあるが<sup>(23)</sup>、同校が尋常中学校となる1886年に至るまでの学科課程を知る史料は管見の限り残されておらず、詳細は不明である。しかし、卒業生の回顧より当時の様子を窺い知ることができるのではないだろうか。

設備が極めて不完全であつて、不規則な半円形に長い机を並べ先生を中心に据へ、畳の上に座り込んで講義を聴いた者だ無論椅子など何れの教場にも有りはしない、今、書経の講釈をして下さつた先生が、次の時間には物理全志を持つて来て字義を辿つて物理学の講義をされると云ふ遣り口、現今の進歩した教育法、教授法から云へば無論比較も出来た話では無い、数学を真面目に勉強すると互に軽蔑する、学科は漢学を主として文章を書く、それに英語、独逸語、支那語を各自希望によつて随意科として学ぶと云ふ工合で、学校としては幼稚とも何とも云ひようの無い位のものであつた。<sup>(24)</sup>

1884年入学の山田珠一も「教科書はやはり四書五経」で漢学中心であったことを述べ、さらに「余力を要する事もな」かつたという<sup>(25)</sup>。山田は大分県出身で同校入学理由を「済々黌と云ふ風変わりの学校が在る、そこでは志気を養ひ精神訓練をする学校であるという事を聞」き、「兎に角

面白い気質を養ふといつた変つた所が気に入ったからだ」と記し、漢学の他に「水戸学の精神を入れる為に弘道館述義といふものを用ひた事は余程苦心の存する事と思ひます」と印象を述べている<sup>(26)</sup>。この回想から察するに「志気」の涵養は積極的な濟々黌の宣伝材料となっていたのかもしれない。

実際、濟々黌は「遵奉する者に非ざれば入校を許さず」として「一、倫理を正し大義を明にす。一、廉恥を重じ元気を振ふ。一、知識を磨き文明を進む」という「三綱領」を掲げていた<sup>(27)</sup>。この「三綱領」について1888年の段階で佐々は次のように解説している。

我黌の主義は既に三綱領に明かなり、而して「磨知識進文明」は世或は之あり、「正倫理明大義、重廉恥振元氣」に至ては滔々たる一世の風潮、予輩未だ之在るを聞かざるなり、於是我黌は世の為さざる所を先にし世の為す所を後にせんとす。我徳を修め我氣を養ひ我体を鍛り而して我智を磨き所謂三育並進に至て而後止まんとす<sup>(28)</sup>

このように佐々は三綱領のうち「正倫理明大義、重廉恥振元氣」という項目は特に濟々黌のオリジナルなものだと自認していた。ここで佐々は「徳」「体」「智」に「氣を養ひ」を加えて「三育並進」と言っており、「氣」の涵養を強調することは、先にみた同心学舎の教育目的に通ずるものであることを確認すると同時に、体系的に整理しているものではなかったというべきである。続けて佐々は濟々黌の規則の特徴として次の五つを挙げている。

- 一、新年、紀元、天長の三大節には祝宴を黌内に張り歎を国旗の下に尽す。
- 一、生徒亡父母の祭日には一昼夜の休業を与ふ。
- 一、生徒は信義礼讓、及質素簡易を主とす。
- 一、眼鏡、襟巻、日傘、手袋（手袋は十七年の追加に係る）を禁ず。
- 一、毎月五里以上の地に遠足す。<sup>(29)</sup>

三、四項目で要求される生徒の生活スタイルの実際の有りようとして、寮での食事が「汁は茶碗一杯、香物は二切れ」と制限され、服装については「和服は袴も共に丈短く、洋服は靴と共に多くの兵隊の小物を用」いており、「足袋は成る丈意地張りて用ぬ所に意気を示」<sup>(30)</sup>していたという記録が残っている。

5項目の遠足については具体的に佐々は「毎月遠足には必ず校員諸子と自ら之を率ひ或は八代に或は阿蘇に菊池に山鹿に高瀬に至所山川地理を觀或は古忠臣英雄の跡を吊」していたとする<sup>(31)</sup>。その実践は、「徒に身体を健康ならしむるのみならず或は懇親を結ひ友愛を厚くし或は忍耐活発の氣象を養成する」<sup>(32)</sup>というように、体力練成だけでなく友愛、忍耐力の涵養を狙った多目的なものだった。目的地は、霊場釈迦院（標高980メートル）、竹崎季長が「蒙古襲来絵詞」を奉納したとされる甲佐神社や加藤清正を祭った岩鼻神社の在る甲佐岳等が選定されており、晩の12時に学校を出発し、翌晩の12時に帰校するといった過酷なものであったという<sup>(33)</sup>。

さらに佐々の挙げた五つの特徴には入っていないが、遠足に共通する同様の効果を狙ったのではないかと考えられる試みが開校3ヶ月後に設置された寄宿舎である。寄宿舎での生活は押入もなく、部屋の大きさも大小様々なので時々部屋替えを行い、机や電灯は自弁という生活だった<sup>(34)</sup>。当時は通学生も寄宿舎のいずれかの寮に籍を置き、毎日一回必ず「懸札」を懸けに寮に出向き、通学者、

寄宿者の区別なく「寮監」が全生徒の監督に当たることになっていたという<sup>(35)</sup>。また、寄宿舎に起臥しながら、食事は自宅でとる「留通学」と呼ばれる制度が在った。卒業生野田寛（1885年卒）によれば、この制度があるために結果として全校生徒の大部分が寮生活を過ごし、「寄宿舎が殆学校全体の観をなして居」たようで、当時通学生だった自分は「少数で肩身が頗る狭」かったという<sup>(36)</sup>。佐々は、「予気風養成の容易ならざるを察し遂に自ら校舎に寄宿し以て其の責に当る」と自ら生徒と寝食を共にしていた<sup>(37)</sup>。回想記の多くが、佐々は一定の学科を受け持って授業をするという事はほとんどなかったと記しており、佐々は生徒を「自分の部屋に呼んで色々な事に就て話したり或は経書等の言葉に就て自分の深く味つた事等を教へて話しをし生徒の精神訓練をするということに努めて居られた」とされている。野田は佐々の教育が「特に重きを寄宿舎に置」いており「先生の談話は非常に面白いと寄宿生から聞かされる」ので自分も寄宿を願い出たと回想している<sup>(38)</sup>。

このように、済々黌での教育は遠足の実践、及び起居を共にすることによって生み出される同志的一体感を通して、士族的価値観を「気風」として養成しようとしていた。つまり、「風変りな学校」は教科以外の実践によって特徴づけられたのである。熊本県立中学校、大江義塾研究が示すように、それらが洋書を取り入れ、緻密に学科課程を組み、当時の生徒を惹きつけようとしていたことを勘案すると、それは、学校整備が不完全だったが故に一層強調された自他の済々黌に対するイメージだったといえよう。

## (2) 振武会の結成

次に振武会について考察する。

紫溟会は1882年12月に「振武会」を組織した。津田は、「振武会趣旨書」<sup>(39)</sup>において、維新後未だ条約改正という課題が克服されていない原因が「独り文智ヲ重ジテ武力ヲ賤ンズルノ弊」だと批判した。振武会の設立目的は日本の武力の振起が目的であり、そこでは皇室、国家を守るために「忠孝節義を貴び、礼義廉恥を重んじ、武芸を鍛錬するを以て主とする」ことで「我日本全国の青年子弟」に「敵愾ノ氣象」「日本魂」なるものを振起させることが重要だと考えたのである。紫溟会の働きかけに応じて師範家が共同して柔術、剣術、棒術、居合、弓術、遊泳を総合的に実施する総合武道場「講武所」を済々黌の北隣に設置した。開場式には来熊中だった山県有朋をはじめ鎮台各将校、県令ら約2400人が列席したという。設立当初の「撃剣」は一師範宛の稽古のみで各師範及び「外来人」の他流試合は行われなかったが、1882年7月には毎月第1日曜日を集合撃剣試合日に定められ、以後他流試合が行われるようになり、例えば1883年5月には振武会員はもちろん、鎮台、警察署からも来場し、撃剣会20組の稽古試合が催されるなど振武会の影響範囲は拡大していった<sup>(40)</sup>。佐々によれば振武会発足と同時期に済々黌では撃剣の外に「健歩」が正科とされ、前出の山田が「済々黌に入つてみると学校の裏に振武会といふ撃剣を教へる所が在り、柔道を教へる所も在り、殆ど是は正科の如くしてやらねばならないという事になって」<sup>(41)</sup>と記すように振武会と済々黌は一体となって教育機能を果たしていた。確かに撃剣は大江義塾でも課外授業として行われていたことであつた。しかし、それは生徒の自治活動の一環として実施されていたものである。済々黌では生

徒の一課外活動に止まらず、師範家らと共に拡大していったのであった。

## 4 紫溟会の組織改革と教育活動の展開

### (1) 紫溟会の政治支配と済々黌の「官立」化をめぐる動き

全国的に民権運動が衰退するにつれ熊本県会における多数の議席数を維持していた九州改進黨に変わって次第に紫溟会が優勢となり、1884年には議席数の3分の2以上を紫溟会が占めるに至った。対立関係に在った民権派の下降傾向を確認した紫溟会は1884年に「紫溟学会」へと改称し、「政党」から「学会」への変質を宣言した。だが、それは表面上のことであり、会員総数を9325人としてより一層政党としての勢力を拡大した。

こうした政界の動きに連動して1887年を境に熊本の中等教育界は大きく変化する。まず、同年9月大江義塾が塾長徳富蘇峰の上京に伴い廃校となった。そして、同年末には中学校令を受け、通常県議会では、県立熊本中学校の予算編成が否決され、同校は翌年3月で廃止となった。この県会では、議員定数44名中、32人を紫溟学会会員が占めており、中学校令が意図する府県一中学校に「匹敵する私学黌」として済々黌を昇格させる目論見があったのである<sup>(42)</sup>。

こうした動きの背景には井上毅が関与していた。井上は、1886年の段階で済々黌の卒業生が数学や理学等の学力面が弱いと分析し「忠孝節義馳馬試験ハ至而簡単之教ニ而、一地方ノ為振士氣にハ適當なるへしといへとも、中外雑居、大勢一転之後ハ、如何なる人物たりとも洋学洋語ニ通せずてハカタデ」と佐々に済々黌の教育方針の見直しを迫っていた<sup>(43)</sup>。さらに文部大臣森有礼が九州巡視を行うことを知らせ、森来校の際には「済々黌之体操ナド一見ニ入レ」、「将来ハ中学校ニナシ度」ことなど説明するよう書簡で伝えていたのである<sup>(44)</sup>。1887年に済々黌は尋常中学校課程を採用し、徴兵令第12条によって徴兵猶予の特権を得て「尋常中学校」という一学校階梯としての機能を持つ教育機関となったのである。

### (2) 紫溟会の組織改革

このような済々黌の「官立」中学化計画が進行する中、1885年に細川護成に従い渡欧していた津田が1887年に帰国した。津田は、西洋に「人々一科専門の業を修め、以て己を利し人を益するの道」、すなわち「分業専門の法」が在ることを発見し、帰国後、アダムスミスの『国富論』の有名なピン製造の例を示して「我国に於ても、今後人々専門の業を務め」るべきだと提案した<sup>(45)</sup>。津田は紫溟学会の有り様を「恰も一派の宗旨の如く而して其の忠君愛国の主義は恰も神道に於ける釈教の仏における儒学の天に於けると同様」と痛烈に批判し、お札や仏像に拝むだけでは直接何の利益もないのだから、「其の主義を実施するの方略如何」<sup>(46)</sup>こそ最も重要だと主張した<sup>(47)</sup>。1888年2月、津田は紫溟会に学術部、世務部、実業部という3部門を設置した。それは、明治憲政下第1回総選挙を控えての政党の体制の整備でもあり、このうち世務部としては「熊本国権党」が発足した。そして、学術部は津田が学部長を兼任し、済々黌の経営だけでなく雑誌『大東立教雑誌』（後に『文学

世界』と改称)、東肥教育会の運営を行った<sup>(48)</sup>。

東肥教育会とは、津田を会長として、「道義ヲ重シ気節ヲ尚ヒ知識ヲ進メ国民ノ資格ヲ養成スル」<sup>(49)</sup>ことを目的として設立された会である。毎月第2日曜日に会員中より3、4名の演説を行い、演説後には質疑討論会を行うことが規則で定められた。事務局は済々黌内におかれ、演説内容は『文学世界』に掲載された。注目すべきはその会員が、済々黌の関係者だけではなく小学校教員がむしろ主であったことである。例えば、同会第一回集会出席会員35名中14名が小学校教員であった。熊本県立中学校を廃止させ、済々黌が官立同等の認可を得た後、紫溟会の教育活動は中等教育のみならず、初等教育をも活動範囲とする方向へ拡大したといえよう。

ところで、1888年当時の済々黌の様子が『教育時論』116号(1888年7月5日)の「九州の教育一斑」と題する社説に、実際に済々黌を参観したという記者によって次のように述べられている。

校舎は輪奐といふにもあらず、宏壯といふにもあざれども、授業管理とも精神を以て主とするに由り、参観人の眼にも校舎なく、器具なく、只精神の透徹するを見るのみく中略>又寄宿舎の規律は甚だ厳正なる者にして、専ら兵式に由りたるにはあざれども、礼節を貴び、気概を養ふの一点至りては、全国この学校の右に出づる者なかるべし。之を要するに、此校は教員生徒とも精神を以て主とするにより、世の風潮を逐ふて、或は左し或は右するの流亞とは、同日に語るべからず。

この記事の中に、前節の回想にあった「風変わり」な学校の一側面を垣間見ることができ、上記のような紫溟会の「気概を養う」教育の目的、目標について、同会の有力な指導者の二人、佐々と津田の思考・発想の分析に焦点をあてて考察していきたい。

## 5 東肥教育会の演説にみる佐々と津田の教育観

### (1) 佐々の場合

東肥教育会第1回集会は、1888年2月に出席会員35名で開かれた。前年に済々黌黌長に就任した佐々は、この日「日本教育の主義」という題で「教育と授業と学問とは互に関係は在るものの其性質を問へば自ら個々別種もの」と、学問と教育を峻別する教育観を披露している。彼は書籍を通して学ぶ学問を専ら「知識」として捉えており、巷間では「教育」という名で実は学問の話ばかりがされていると主張した。佐々のいう教育とは、授業というかたちで時間を限り、その時間内で知識技能を教授するのではなく、「人間全部を教育し一種の気風を養成する」、「人物養成なるもの」であった。従ってこの演説では済々黌は「学芸教授所」ではなく「人物養成所」だと再三主張された<sup>(50)</sup>。

彼が肯定的に捉えていたのは「往時」の日本の教育であった。佐々によれば、維新以前の日本では「和漢」の学びによる「道徳」と「武芸」による「体格」作りが行われていたとされ、「徳育と体育」による教育が「精神気風の養成」をなしたという。

上述の演説の中で、佐々は「我々同胞は日本の人民にして日本の国土に住するものなれば日本人民資格を造りて日本の国土を堅固にし日本の国威を四方に輝す事を得る」ことを自らの教育の目的

だと発言し、そのためには「故に三種の神器を以て日本道德の標準とし、此建国歴史を以て日本国民の感情を薰陶し以て忠武恭順恥を重んじて死を軽ずるの精神を錬磨すべく忍耐強毅進取為の氣風を養成すべし」と明言する。佐々の中で「忍耐強毅進取為の氣風を養成」することは、国家のために命を投げ出すことができるという精神と結びつけられて考えられていた。1887年頃開かれていた済々黷の演説会でも「毎次生徒の演説文章の中に楠木正成や千早城籠城の引證のみが多く討死の覚悟が先に立」ったものだったという<sup>(51)</sup>。

また、佐々の教育論の特徴として、教育を行う場についての区分が挙げられる。佐々は教育の場について「家庭教育」と「学校教育」と更にもう一つ「郷党教育」というものを提案した<sup>(52)</sup>。この「郷党教育」とは肥後藩に在った教育形態で、「〇〇連」（〇〇は町名）と称して子弟が集合し、その集団の中での規律や行動様式を学ぶもので、佐々もまたそのシステムの中で育っていた。佐々がこの「郷党教育」に注目した理由は、連では年長者が「最上主権者」として「連中総ての少年を統括し事大小となく皆年長の指揮」していた点に在り、さらに連に必ず「法則」や慣行が在り、「少年の勸懲を支配し一たび連中に加入するや皆此法則に服従せざるを得ず」というように厳しい上下関係に基づいて絶対服従の関係が成り立つことに在った<sup>(53)</sup>。佐々は、これをさらに全国に広めることを希望し、多数の小学校教員の集まる集会において、「小学生徒」を組織するために有効な方法だとしてこの「郷党教育」を主張していたのであった。

## (2) 津田の場合

津田もまた、東肥教育会において演説を繰り返した。彼は特に2年間滞在したイギリスの発展ぶりに注目し、イギリスが繁栄した理由を分析し、日本が採り入れるべきだとする事柄を次のように論じている。

我日本人にも何卒倣せ度しと思ふものは、英国人が進取の氣象に富むことなり、此の進取の氣象に富む事は、徒に内国の事に在らず、乃ち英国人が航海の業を好み、冒険の風を養ひ、或は貿易に或は殖民に、或は伝道に、或は漫遊に、凡そ聊にても利の在る所は、則ち風波を畏れず、危険を避けず、千里の遠きを厭はず地球の表面に縦横する事なり<sup>(54)</sup>

彼は、イギリスではロビンソンクルーソー漂流記以来百年間で「進取の氣象」が養成されたとし、「航海冒険の氣象」をもって世界中を飛び回る人材が育ったことがイギリスの繁栄に繋がったとする。そう分析する津田は、「日本人」が国外へ自ら行動していこうとしないことを問題とした。「我日本人が英国に倣ふ所」としたのは、「政治」や「舞踏会」など制度的・文化的側面ではなく、世界へ向かって行動する「此の航海冒険の氣象」という精神面であった。

そのような考え方を抱いて帰国した津田は、渡欧の土産として3枚の油絵を済々黷に寄贈している。それは、トラファルガー海戦におけるネルソンの戦死の図、イギリスの将軍ウエリントンがナポレオンを敗った場面を描いた図、そして、イギリスの政治家グラッドストンの演説風景の3枚であった。当時、済々黷で学んでいた学生は、津田がこの絵を「楯間に掲げ生徒に日夕仰視せしめて

精神気風を養成せしめられた」<sup>(55)</sup>、「観感の際、如何に吾々の若き血潮を湧かせた事でありましたらう」<sup>(56)</sup>と振り返っている。ここでは生徒が絵に対してどういう印象を持ったのかは問題ではない。重要なのは、絵画掲示の意図を生徒がどう認識していたかということである。このような印象を記した生徒は、「進取の氣象」を子弟に振起させようという津田の意図が絵画提示の背景に在ることを理解していたのであった。

このように「氣象」という不可視な部分への教育について声高に主張するという点では、津田は佐々と共通していたが、道徳の拠り所を何にするかという点についての両者の視点は相違を示していた。かつて、津田は1884年3月21日付『紫溟新報』の社説「紫溟会学会設立の趣旨」の中で「道徳学の完全なる基礎」として「東洋の教」を主張していた。しかし、帰国後に記した1888年1月8日の『紫溟新報』の社説「普通学の徳育」の中では、西洋の倫理学の必要も訴えており、「欧州各国の道徳も我が国の道徳も敢えて異ならざるべし」という認識を示すようになる。さらに津田は同社説において「我が国の道徳」においてヨーロッパに及ばない点として3つの点を指摘する。すなわち、「商売取引の上に於いて信用少な」いこと、「社会交際の上に於いて礼儀を欠」くこと、「百般時務の上において不規則為るが如き」ことである。津田は、これら3つの「道徳」は、「宗教」ではなく「習慣より生ずる道徳」の次元であると分析し、この欠点を補うことが重要だとした。帝国憲法発布間近、近代国家として世界へ台頭する準備が整いつつ在った時期、津田が日本の徳育において育成するべきだとしたものは、近代資本主義社会において要求される作法や契約だった。

津田が取り入れた分業論の根底には「何によらず一芸一能あるものは、単一に其事にのみ勉励すれば、一世の中には、必ず人に長ずる所の出来るもの」<sup>(57)</sup>という人間理解が存在した。彼は東洋各国が欧米列強と拮抗する力がないのは、東洋の学問が「古来修己治人と云ひ、入相出将と云ひ、只管ら道徳政治の点にのみ着眼し」ているからだとして分析し、「殖産に経済に商法にその他社会万端の事に於て十分注意せねばならぬ時節」に適應するため、個々人が専門を究めることを求めたのだとした<sup>(58)</sup>。

紫溟学会が組織変更をした翌年佐々は、鬢長を後身に譲り、国権党の副総理となって政治活動に専念していった。一方、津田は自らの教育を具体化するため新たに1890年に熊本文学館を設立した。紫溟学会は、第一高等中学校長を辞してまもない古荘嘉門を第三代学会長に任命し、津田を学術部部長に専念させて教育事業を拡大していった。すなわち、紫溟学会の実質的な教育機関として、1891年に熊本の四つの私立学校〔熊本法律学校、春雨鬢（医学教育機関）、済々鬢、熊本文学館）を合併し、普通科と専門科からなる「九州学院」という高等教育機関を組織していった。

## おわりに

以上の考察から以下、まとめておきたい。

紫溟会における「人物養成」観が形成されていく過程については、物的条件が比較的整わなかったという個別組織的条件、そして、常に民権派への対抗が課題となっていたという熊本の地域的条

件がまず、確認されなければならない。そして、困難を開く手段が学問的考究ではなく、「気風」という精神面の高揚に求められていた。彼らにとってそのことこそが「教育」とされていたのである。

いみじくも津田が「普通学の徳育」のなかで「気風と云ひ、氣象と云ひ、品性と云ひ、元來意義漠然たるものにして、之を日用人倫の上に適用するに至りては、決して画一なるものに在らず」と述べているように「気風」とは普遍的に定義することができないものである。それを養成する方法として取り入れられたのが、寄宿舎生活、遠足、郷党教育といった身体を通して行われる集団による教育であった。佐々はこのような教育方法を通して「国民護国ノ義務」を果たせる「日本人民」の育成を期待したのである。同心学舎以来彼によって強調されてきた集団による教育の場合、活動を為したか否かに評価基準が設定されてしまい、生徒の取り組み姿勢や教育的効果は問いがたい危険性を有する。学校生活を振り返った卒業生の回想の中には、肯定的であれ、否定的であれ集団の雰囲気にもまれるといった状況がよく示されているのではないだろうか。

本稿により、学問的「知」や「理」という面に立脚したというよりは、「気風」「精神」といった何ら整理・体系化されていない標語を用いた〈熱意〉の上に成り立ってしまう、成り立っていた当時の「教育」の「現実」を再認識することができる。その中から生徒の生活・身体、そして精神を主たる「教育」の範疇とした紫溟会のそうした「教育」が生まれていたのである。それは個人の精神鍛錬という側面よりは、集団と個の関わりを強く意識させる、そうした性格を持つものだといえよう。斎藤氏の研究により明治30年代頃から生徒の身体や行為への過剰なまでの統制と干渉、「生徒管理」が進行したことが指摘されるが、自由民権運動が展開した明治10年代において、紫溟会の「人物養成」のあり方はその文脈の要素を十分有しているのである。

津田は、自身の留学経験からイギリス人の「冒険の氣象」を見倣い自ら世界に具体的方向性をもって行動する人間像をもとめた。また、津田は世界を見据えた新しい考え方を導入した。その一つは、個人の能力に視点を置き、専門的能力を有するスペシャリストを養成するという考え方である。そして、彼が新たに論じた「道徳」は、伝統的な思想や宗教の体系に求められたものではなかった。東西の倫理書や宗教を単純に比較するのではなく、資本主義社会に通用するべく「道徳」を提唱したことである。津田は確かに「新しい思想」を導入したといえるだろう。しかし、ここで留意すべきは彼にとって佐々の主張する「気風」を養成すること、及び「武」を尊ぶことは否定されることではなかった、むしろ彼がそれを前提として肉付けしたということ、その点である。その危険性、および脆弱性については今後の課題としたい。

### 〈注〉

- (1) 紫溟会については主に政治史分野で研究が進み、皇室を翼賛したことおよび近代日本のアジア「侵出」の文脈において、すでに1880年代に直接中国、朝鮮に事業を興し大陸とのパイプを築いてきたことが中心に明らかにされてきた。例えば、船木邦彦「熊本国権党の研究—

- 佐々友房を中心として－(1)～(4)』、『歴史と現代』(九州近代史研究会)5～7号(1964年)、上村希美雄「熊本国権党の成立」、『近代熊本』17号(1975年)、広瀬玲子「アジア連帯主義から大アジア主義へ－熊本紫溟会を中心として－」、『史艸』(日本女子大学史学科)18号(1977年)、佐々博雄「熊本国権党と朝鮮における新聞事業」、『国士館大学人文学会紀要』(国士館大学文学部人文学会)9号(1977年)、同「熊本国権党系の実業振興策と対外活動－地域利益との関連を中心として」[同『紀要』24号(1991年)]などが在る。
- (2) 本山幸彦「明治時代における国家主義教育の源流」『京都大学教育学部紀要』第6号(1960年)。他に紫溟会が熊本教育界支配の意図をもって県立熊本中学校を廃止する過程を明らかにした花立三郎「明治十年代熊本における政治と教育」『季刊日本思想史』第7号(ペリカン社、1978年)や、明治中期の地方政党の教育支配の様相を紫溟会を対象として描いた上河一之「明治中期における中等教育機関の党派的性格について－九州学院成立を中心として－」『熊本女子大学学術紀要』第31巻(1989年)が在る。以上の諸研究を通して、熊本における中学校の設立をめぐる紫溟会の政治的役割は相当に明らかにされてきたといえる。
- (3) 『熊本県教育史』(上巻、1931年)の第4章第3節「初等教育」及び同第4節「中等教育」。
- (4) 佐々友房は1854年に生まれ、藩校時習館で学び居寮生に抜擢された。西南戦争では熊本隊の幹部として参戦し、1879年に同心学舎を創設した。1881年に紫溟会幹事、翌年には済々黌幹事となる。1889年に紫溟学会政治部「熊本国権党」の党首となった後1992年に国民協会を結成し、条約改正交渉に対する反対運動を展開した。
- (5) 佐々友房「済々黌歴史」『文学世界』第12号(1888年5月)。この「済々黌歴史」は、同号以下、第13号(同年6月)、第14号(同年7月)、15号(同年9月)、16号(同年10月)に計5回にわたって掲載されている。傍線は引用者。
- (6) 「同心学舎建設趣意書」1879年、済々黌歴史資料館所蔵。
- (7) 宇野東風「松下塾(惜陰舎)の話」『熊本県教育史』上巻所収。
- (8) 三浦喜伝「惜陰舎時代の坤次さんと」[『克堂佐々先生遺稿』(以下、『遺稿』と略す)(改造社、1936年)]所収。
- (9) 高橋長秋『高橋長秋伝』(稲本報徳社出版部、1938年)。「坪井塾」とは惜陰舎の別称である。
- (10) 『熊本県教育史』上巻(1931年)の第4章第3節「初等教育」
- (11) 佐々友房「済々黌歴史」『文学世界』第14号(1888年7月)。
- (12) 「同心学舎創立ノ初メ同志ノ人ニ対エタル談話」(年代不明)、佐々友房関係文書、国立国会図書館所蔵。前掲(5)にも同じ内容が記されている。
- (13) 詳しくは前掲(1)の船木論文を参照。
- (14) 1852年生。父山三郎は、横井小楠、元田永孚と共に実学党の主要人物であった。津田は藩校時習館で学んだ後、実学党の幹旋を受けて1869年にアメリカへ留学し、モリソン中学校を卒業後、更にエール大学に進学し法律、政治を中心に学び一年間在学した。1873年に帰国後、北京公使館一等書記官見習となるが、依願免職し中国を旅している。帰国後、大蔵省紙幣局

などに勤め、西南戦争後はまたも官職を辞めて熊本に戻り、実学党系の私立学校「共立学舎」において英語教師を務めていた。

- (15) 『紫溟雑誌』は、「社説」、「論説」、「雑記」、「外報」、「紫溟会記事」からなり、第一号（1882年3月）から第30号（同年12月）まで発行された。第一号は井上毅、岩倉具視、山県有朋、松方正義、山田顕芳らに送付され、井上は『紫溟雑誌』を高く評価している。[『井上毅伝 史料篇第五』、國學院大學図書館（1975年）] 所収。
- (16) 『紫溟雑誌』の主たる論題であった主権論等については、前掲(1)の上村論文を参照。
- (17) 前掲（11）。
- (18) 花立三郎『大江義塾 民権私塾の教育と思想』（ペリかん社、1982年）に詳しい。
- (19) 「済済齋規則」1882年、済々齋歴史資料館所蔵。
- (20) 前掲（19）。
- (21) 佐々の「済々齋歴史」については前掲（5）、山下岩之助の「済々齋歴史」については『二十五回恩賜記念多士』（熊本県立中学済々齋奨学部、1908年）所収。
- (22) 「旧職員」『済済齋同窓会名簿』（済済齋同窓会、1972年）所収。
- (23) 佐々博雄「熊本国権党と朝鮮における新聞事業」『国士館大学人文学会紀要』（第9号、1977年）。
- (24) 小早川秀雄「予の追懐」『創立三十周年記念多士』（1911年）。（以下、『三十周年多士』と略す）
- (25) 山田珠一「学生気風の変遷」『熊本県教育史』上巻所収。
- (26) 前掲（25）
- (27) 「済々齋規則」（第一条）『遺稿』所収。
- (28) 前掲（5）。傍線は引用者。
- (29) 前掲（5）。
- (30) 「寄宿舍の沿革及現況」『三十周年多士』1911年所載。
- (31) 前掲（30）。
- (32) 前掲（30）。
- (33) 学校の行事として正規の記録は残されていないため、回想記より場所を特定した。
- (34) 森崎武真彦（明治25年卒業生）「思い出の俣」『創立五十周年記念多士』、1932年所収及び「寄宿舍の沿革及現況」『三十周年多士』1911年所載より。
- (35) 「寄宿舍の沿革及現況」『三十周年多士』1911年所載。
- (36) 野田寛「余が目に映じた佐々克堂先生」『遺稿』所収。野田はこの回想記を1931年3月に執筆している。
- (37) 前掲（36）。
- (38) 前掲（36）。
- (39) 「振武会趣旨書」（能田益貴『椶溪津田先生伝纂』、1933年）所収。
- (40) 「紫溟新報」1883年5月4日付。

紫溟会における「人物養成」観について

- (41) 山田珠一前掲 (25)
- (42) 熊本における政争と教育の関係については前掲 (1) の花立、上河論文に詳しい。
- (43) 佐々友房宛1886年11月3日付書簡『井上毅伝 史料篇第四』所収。なお史料引用中の平仮名、片仮名混在は史料原文のまま。
- (44) 佐々友房宛1887年1月3日付書簡『井上毅伝 史料篇第四』所収。
- (45) 津田静一「護成公子の御模様と分業問題」(1888年)『樗溪津田先生伝纂』所収。
- (46) 前掲 (45)。
- (47) 津田静一「紫溟会学会の主義方略」『文学世界』第17号(1888年11月)。津田は「最大捷径は分業の法を利用するよりよきはなく是れ今春吾党が大改革を行ひ従来の組織を変更して更に学術、世務、実業の三大部を置き」と紫溟会の組織改革について述べている。
- (48) 『大東立教雑誌』は済々黌内大東立教雑誌社から1887年1月に第1号を発行され、第11号(同年4月)より『文学世界』と改題された。『熊本県統計書』によれば、両雑誌の発行部数は1887年が2552部、1888年が4429部である。『文学世界』は第18号(1888年12月)まで発行された。
- (49) 「東肥教育会」『文学世界』第1号(1888年4月)。
- (50) 佐々友房「日本教育の主義(東肥教育会演説筆記)」『文学世界』第11号(1888年4月)。
- (51) 村上典吾「高田原時代の済々黌」(『熊本県教育史』上巻)所収。詳細な演説記録は不明である。
- (52) 佐々友房「郷党教育」『文学世界』第13号(1888年6月)所載。
- (53) 前掲 (55)。
- (54) 津田静一「欧州の実況」(1888年2月)『樗溪津田先生伝纂』。
- (55) 「宇野東風氏の談」『樗溪津田先生伝纂』。
- (56) 木村亥熊(1889年同窓生)「四十余年の昔を語る」『創立五十周年記念多士』1932年。
- (57) 前掲 (47)。
- (58) 前掲 (47)。

## The View of “Jinbutuyousei” In Simeikai

SAKIMOTO Ai

This paper will highlight the view of “jinbutuyousei” in a politics organization -Simeikai that was established in 1884 .

A large number of studies about history of secondary education have been made on the background of establish of Jinnjo-Chugakko and the Area’s view of Jinjo-Chugakko.what seems to be lacking , however, is the actual of education of daily living in school.

A general view of education in Simeikai reveals a significant characteristics. The education in Simeikai is to train their mind to overcome every hardship to attain your purpose. Absorbing in order to train it was dormitory and field trip and . Oegijuku was established by Soho Tokutomi in 1884 in kumamoto has political science class.Oegijuku is particularly good at teaching it. In competention with Oegijuku member of Simeikai attache great importance to group action and discipline than intellectual education.

What aim of education did Simeikai have? It offers the key to an understanding Tomohusa Sasa and Seiiti Tuda who was key person of Simeikai’s . It is aim of education for Sasa to grow a person who work for nation whatever may happen. Tuda insisted that Japanese’s student should have the power in the arena of international competition.

Toshihiko Saito studied the problem of student management in late Meiji .But we are now able to see the problem of student management in earlier Meiji